2020年10月25日（日）「賜物を用いる賜物」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 6:1-6

- 1 太陽の下、私はある災いを見た。それは人間に重くのしかかる。
- 2 神が富と宝と栄誉を与えて、望むものは何一つ欠けることのない人がいた。だが、神はそれを享受する力をその人に与えず、他の人がそれを享受することになった。これも空であり、悪しき病である。
- 3 人が百人の子どもを得て、長い年月を生きたとする。人生の歳月は豊かであったのにその幸せに心は満たされず、また埋葬もされなかった。ならば、死産の子のほうに幸いだと言おう。
- 4 確かに、その子は空しく生まれ、闇を歩み、その名は闇に覆われる。
- 5 太陽を見ることも知ることもないが、この子のほうが彼よりも安らかである。
- 6 たとえ千年を二度生きても、人は幸せを見ない。すべての者は一つの場所に行くのだから。

《新改訳 2017》伝道者の書 6:1-6

- 1 私が日の下で見た悪しきことがある。それは人の上に重くのしかかる。
- 2 神が富と財と誉れを与え、望むもので何一つ欠けることのない人がいる。しかし神は、この人がそれを楽しむことを許さず、見ず知らずの人がそれを楽しむようにされる。これは空しいこと、それは悪しき病だ。
- 3 もし人が百人の子どもを持ち、多くの年月を生き、彼の年が多くなっても、彼が良き物に満足することなく、墓にも葬られなかったなら、私は言う。彼よりも死産の子のほうがましだと。
- 4 その子は空しさの中に生まれて来て、闇の中に去って行き、その名は闇におおわれ、
- 5 日の光も見ず、何も知らない。しかし、この子のほうが彼よりは安らかだ。
- 6 彼が千年の倍も生きても、幸せな目にあわなければ。両者とも同じ所に行くではないか。

【挨拶】

毎年この時期にビサイドチャーチ東京との講壇交換の恵みにあずかせていただいておりますが、今年はコロナのためお互いの教会に足を運ぶのが難しい状況にあります。そこで、敬愛するA先生からご提案をいただき、本年度はお互いの中継礼拝に参加することで、二教会の新しい交わりの実現を期待することになりました。私の中にはなかった思考に感嘆するとともに、今後の宣教の可能性を探る試みになると感じております。改めて、福音宣教というものは、一教会だけの成長・発展を望むようなものではなく、キリストのからだとして教会同士が協力し合うべきだということを教えられています。

【序論】

さて、今日は東伏見福音キリスト教会の中継礼拝をご視聴いただいておりますが、現在この教会で学んでいる「コヘレトの言葉」（伝道者の書）から御言葉を取り次がせていただきます。今日からちょうど6章に入りますが、ここでは私たち人間に与えられている「賜物」をどう管理するかという問題が扱われています。「賜物」と聞きますと、何らかの能力を思い浮かべる方が多いかもしれませんが、それも含めて、ここでは「富」「宝」「栄誉」「子宝」「長寿」といった「人生に付随するもの」すべてが「賜物」と呼ばれています。賜物は多く与えられる場合もあれば、少なく与えられることもある。量の違いこそあれ、誰もが何かを持っています。まずは皆様に、ご自分にとっての「賜物」とは何であるかを考えてみていただきたいのです。

【本論】

本論 1. 第一の悲劇：賜物を用いる能力がない人

太陽の下、私はある災いを見た。それは人間に重くのしかかる。(6:1)

本書には「**太陽の下**」（日の下）という表現がよく出てきますが、この言葉が出てきたらまず思い浮かべていただきたいのは、無神論的な世界観です。その考え方によると、この世界は無機質に廻り続けているだけであり、同じサイクルがひたすら繰り返され、人間の命もたまたまそこに生じたものにすぎない。100年に満たない一生を、ひたすら食べ、飲み、排泄し、労働し、寝て、起きて…そんなことを繰り返して一定期間過ごし、そして死んでいく。そういう「意味のない」「空しい」世界観を著者は敢えて呈示するのです。読者は、ふむふむ、そう言われてみればそうかもしれないなどある種の納得をする。

「**人間に重くのしかかる**」という部分は、直訳すると「**人の上に大きい**」となります。何か大きなものがズシッと肩にのしかかってくるイメージでしょう。その「重たい何か」は次の節で明らかにされます。

神が富と宝と栄誉を与えて、望むものは何一つ欠けることのない人がいた。だが、神はそれを享受する力をその人に与えず、他の人がそれを享受することになった。これも空であり、悪しき病である。(6:2)

ある「賜物」に溢れた人がいたといえます。彼／彼女には「**富と宝と栄誉**」が与えられ、何一つ困ることのない人生を謳歌することが許されました。ここで読者は、自分の周り

にいる「そういう恵まれた人」を思い浮かべることが求められています。それは身近な人かもしれないし、どこかの有名人であるかもしれません。器量が良く、経済的に豊かで、良い家族に生まれ、スポーツ万能、成績も優秀……そんな人でしょうか。誰もが羨む人生、欲しいものは何でも持っている人であります。ところが、コヘルト（著者）はその人の人生に一点の滲を付けるのです。「神はそれを享受する力をその人に与えなかった」と。これは「一点の滲」でありながら、その人の人生全体を陰に隠してしまうほどの影響力を持ちます。なぜなら、その人はせっかく持っている「賜物」を適切に用いる術を知らないからです。賜物を用いる賜物とでも言いましょうか。最も肝心なところが欠落しているのです。

これは、一つの実話に置き換えてみると分かりやすくなるでしょう。あるところに高価なギターを買った人がいましたが、良い音が出なくて気に入らず、お蔵入りしていました。ある日、有名なギタリストが自分の町にやってくることを知り、埃をかぶったギターを引っ張り出して会場へ向かいました。コンサート終了後、楽屋へ赴き、そのギタリストに自分のギターを見せ、「こいつはこれこれこんな値段で買ったのに全然いい音が出ないんですよ」と訴えたところ、「どれどれ？何が問題なのか見てあげましょう」と試弾を始めました。その音の美しいこと。持ち主は、自分が弾いたときには一度も聞いたことのない音に衝撃を受けました。そしてギタリストは言いました。「こんなに素晴らしい楽器を触ったのは生まれて初めてです。ぜひ私に引き取らせてください」と。

これは笑えない笑い話です。人はどんなに良い物を持っていても、使いこなす能力がなければ、それを持っている意味が半減する、あるいはゼロになるかもしれません。これは、人の人生全般において言えることであり、「賜物」として素晴らしいものが与えられていても、それに気づかなかったり、有効活用しなかつたり、磨いてより良いものにしようとしなければ、まさに「宝の持ち腐れ」となります。

皮肉なことに、著者は「賜物」そのものを与えるのも、賜物を用いる「能力」を与えるのも神であると言うのです。そして、不運にもその能力が与えられなかった人は、持ち腐れとなった「宝」が別の人の手に移ってしまうと。このようなことは実際によく起きるのであり、著者はこれを「**悪しき病**」と呼びます。

本論 2. 第二の悲劇：幸福を味わえない人

人が百人の子どもを得て、長い年月を生きたとする。人生の歳月は豊かであったのにその幸せに心は満たされず、また埋葬もされなかった。ならば、死産の子のほうが幸いだと私は言おう。(6:3)

二番目の逸話が出てきます。今度は特に「子宝」と「長寿」に恵まれた人の話です。「百人の子ども」というのは誇張ではありますが、古代の王室ではそれくらい多くの息子娘を持つ者がいないわけではありませんでした。ギデオンには息子だけで 70 人（士師 8:31）、アハブ王にも 70 人の子どもがいたと言われます（Ⅱ列王 10:1）。旧約において「子宝」と「長寿」は祝福のしるしと考えられていました（創世記 24:60、詩篇 127:3-5 / 出 20:12、申命 11:9, 21、箴言 28:16、イザヤ 65:20）。しかしながら、実際問題として、多くの妻、多くの息子を持つことは、一族と国家に災いをもたらすケースが少なくありませんでした。ソロモンが多くの外国の妻をめとった動機は、おそらく貿易のための外交手段だったと思われそうですが、その結果として諸外国の神々が持ち込まれ、ソロモン自身も偶像礼拝へと誘われました。また、ダビデの息子たちは権力争いをし、王子同士が殺し合い、果ては父親暗殺計画を企てる者まで現れました。

長寿に関して申しますと、創世記 5 章には初期の人類が驚くべき年数を生きていたという記事が出てきます。1000 年に近い年齢というのは現代の私たちには想像もできないものですが、神と共に歩んだ人々の系図として、長寿が祝福の象徴とされているとも読めます。今日のコヘレト 6:6 に「たとえ千年を二度生きても、人は幸せを見ない。すべての者は一つの場所に行くのだから」という表現が出てきますように、2000 年生きるという、聖書登場人物の誰も達成していない長寿が、一つの「大祝福」として例示されています。これも誇張ではありますが、それほど祝福された人であっても、人は幸せではないかもしれないというのです。なぜか。それは、彼／彼女が「心は満たされず、また埋葬もされなかった」からです。

自分の人生に満足できないということは、誰にでもあることでしょう。そもそも「幸せ」という言葉自体が抽象的であり、主観的な事柄であると言われます。内閣府・経済社会総合研究所が「幸福度研究」について書いている記事を読みました。そこでは、「幸福感」についてこのように説明されています。

「一般に言われる幸福度研究は、主観的幸福感と呼ばれる人々の主観的な生活の評価や幸福感を中心に研究する複合領域の分野で、哲学に始まり、医学、公衆衛生、心理学、社会学、経済学などの分野の研究者が取り組んでいるものです。《中略》本誌は生活の認知的評価（生活満足度のよう）と感情的生活の喜び（ムードの水準など）をカバーする。《中略》しかし、「幸福」は、上記のような「主観的幸福感」ととどまるものではありません。古代ギリシャの哲学者アリストテレスによれば、幸福とは、人生における最高の善であり、それ自体が追求されるものです。幸福感とは必ずしも一致していません。」（http://www.esri.go.jp/jp/prj/current_research/shakai_shihyo/about/about.html）

「幸福」という事柄は、その人がどう感じるかという領域にあり、固定できる概念ではありません。物質的に十二分に満たされていても満足できない人もいれば、生きていくのがやつの生活でも満足している人もいます。幸福度が低いところに向上心が伴うというデータもあり、不満足が「悪」とは言い切れない面もあります。ただ、コヘレトの見解では、どんなに満たされた人生であっても、心が満たされなければそれは悲劇だということです。

本論 3. 第三の悲劇：敬われない人

「埋葬もされなかった」というフレーズが出てきます。これは子どもや孫から大切にしてもらえない悲しみを表すでしょう。ヘブル人にとっては、最大の不幸であり、恥辱でした（イザヤ 14:19、エレミヤ 22:19）。彼らにとって、先祖の墓に入ることは、まさしく人生の栄誉だったのです。コヘレトは、そんな最期を迎えるくらいなら、生まれなかった方がマシだとまで言い切ります。

ならば、死産の子のほうが幸いだと私は言おう。確かに、その子は空しく生まれ、闇を歩み、その名は闇に覆われる。太陽を見ることも知ることもないが、この子のほうが彼よりも安らかである。(6:3b-5)

この部分は気をつけて読まなくては、流産を経験された方や子を幼くして亡くされた方を深く傷つける言葉ともなり得ます。コヘレトが言わんとしていることは、人生の不幸を経験するよりは、生まれてこなかった人の方がまだ幸いだということです。生まれ、人生がスタートし、様々なものが「賜物」として与えられても、それを楽しむ能力がなく、結局誰かのものとなり、人々からは嫌われて死んでいくのであれば、むしろ生まれない方がよかったのではないかと。皮肉に満ちた物言いではありますが、彼の言うことにも一理ないとは言えません。

さて、コヘレトの言葉はこのように、「太陽の下」の人生を徹底的に描き出し、無意味だ！空虚だ！そうだろう！？と読者に問い続けるのですが、そこには常に隠された裏側のメッセージがあります。「もし神なしに生きるなら、人生とはそういうものだ」という結論にどうにか到達させたいのです。これを肯定的な言葉で言い直してみると、「それなら、神と共に生きる人生ならどうだ？」となります。

コヘレトは、私たちに与えられる様々な「賜物」を、その言葉の通り、神からの「授かり物」あるいは「預かり物」と認識させようとしています。それらはすべて人生の終わりに神にお返ししなくてはならないものであり、一時的に借りたものを如何に有効活

用し、神のために用い、増やし、それを喜ぶかが問われていると。賜物は多く与えられる人もいれば、少なく与えられる人もいます。しかし、多く与えられても使いこなせないことも多々あり、少なく与えられたものを驚くほど磨き上げ、増し加えてしまう人もいます。それはひとえに、「賜物を用いる能力」のあるかないかにかかっているのです。私たちが神に求めるべきは、この「賜物を用いる能力」ではないでしょうか。必ずしも多くのものが与えられなくてもよいのです。身の丈に合ったものが与えられ、それを使いこなす、神と人とのために豊かに用いていくことをむしろ目指したい。賜物の授与者である神を常に自分の人生の先頭に置くとき、この「賜物を用いる能力」は必然的に与えられていきます。なぜなら、そのような人は、神を畏れ、与えられたものに感謝し、神のために無駄なく賜物を用いていきたい、磨きたい、増やしたいと切望するようになるからです。そこに、神にささげる心がメキメキと育ち、ささげるところに神が更に増し加えるという良循環が生まれます。このように、神との密接な協力関係を結んだ人には、この上ない幸福感が与えられるでしょう。

【結論】

私の人生には「牧会」という役割が与えられました。私自身は、自分の能力のある部分は人並であっても、ある部分では劣っているということを自覚しています。不足しているところを祈り求めることもあります。祈ってみたら本当に与えられることもあります。必要なければ神はお与えになりません。私がこの働きをしていて最も幸せを感じる瞬間があります。それは、御言葉をじっくり学んでいる時です。そして、神様が何を語っておられるのかが見えてくる時です。限られた能力の中で、神を知る喜びが与えられる。そのように生涯歩んでいけたらと願っています。

一人ひとり、異なる賜物が与えられており、違った役割を担っています。今生きているところで最大限に賜物を用いていくことを目指してみてもいいでしょうか。そして、何よりも「賜物を用いる賜物」を求めていただきたい。神を畏れ、神のために用いていくところに主眼を置いて、ご自身の賜物に誇りを持っていただきたいのです。また、まだご自分の賜物が何であるのかがよく分からないという方は、そのことも明確にされていくよう祈ってみましょう。神様は必ずその祈りに応えてくださいます。

【祈り】

私たちに尊い人生を与えてくださった天の父なる神様。その人生の価値に人はどれほど気づいているのでしょうか。また、それを心から楽しんでいるのでしょうか。与えられた賜物を有効に活用しているのでしょうか。人と比べて、多い少ないと不平を漏らすことに終始してはいないでしょうか。むしろ、それぞれに与えられた分に応じて、それを存分に味わい楽しむ能力を与えてください。与えられた環境、富、賜物は一人ひとり異なりますが、神と共に歩むところに、すべてが感謝となり、磨きをかけて主にお返しする人生を歩みたく願います。私たちに「賜物を用いる賜物」を豊かに与えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人間一人びとりに尊い人生を与え、各々の道を楽しむことを求め給う、父なる神の愛、神なき空しい人生より解放し、生きることにまことの価値を見出させ給う、主イエス・キリストの恵み、

賜物そのものよりむしろ、賜物を用い尽くす能力で満たし給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。